





# 入学おめでとう

学長 西野 武志

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本日、激しい受験戦争を終えられ、見事に難関を突破して京都薬科大学に入学を果たされた皆さんに、教職員一同心よりお祝いを申し上げますと共に、終始皆さんを励まし、支えてこられたご両親、ご家族の方々に衷心よりお慶びを申し上げます。今年、本学は創立120周年を迎えました。この記念すべき平成16年度に入学された皆さんには、忘れることが出来ない思い出深い年度になるものと確信致しております。

皆さんはこれから少なくとも4年間は、本学で勉学に励まれるわけですが、実は私もこの4月から学長になったばかりで、皆さんと同じ一年生であります。私の任期は4年ですので、丁度皆さんが本学を卒業される時私も卒業できることとなります。私も今迄とは異なった立場で勉強に励まなければならないこととなりますが、一緒に卒業できる日を楽しみに、お互い頑張ってみましょう。

ところで、本学は明治17年(1884年)京都私立独逸学校として創立されて以来、私立京都薬学校、京都薬学専門学校を経て、昭和24年に京都薬科大学へと昇格しました。その後、昭和3年には製薬技術の革新に対応して製薬化学科を、昭和48年には薬学における生物学的分野の重要性から生物薬学科を増設して、一万数千の薬学領域での優れた人材を世に送り出し、本年で創立120周年を迎えます。現在は大学院薬学研究科薬学専攻・臨床薬学専攻、生命薬学研究所、創薬科学フロンティア研究センター、教育研究総合センター、共同利用機器センター、薬用植物園、放射性同位元素研究センター、動物研究センター等を併設するに至っております。また文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業として、学術フロンティア推進事業、ハイテクリサーチセンター整備事業、産学連携研究推進事業が認められ進行しております。これらの事業は5年後に継続できるかどうかの再評価がありますが、抗エイズ薬研究の第一人者木曾教授を中心に行なわれている学術フロンティア推進事業は昨年再評価され、今回は「分子認識を基盤とする創薬科学研究 - 難病克服のための新薬開発を目指して -」のテーマで継続が認められました。

単科大学としてこのように3つの事業が認められているのは、非常に稀有なことでありますが、さらに今後の一層の発展を期待して、薬物治療学教室、代謝分析学教室、病態生理学教室、微生物学教室を中心とした「オープンリサーチセンター」の設置に向けての企画が進行中であります。

さて、皆さんは受験戦争を終えられて、恐らくホッとされていることと思いますが、今がようやくスタートラインに立ったところだという事を絶えず認識しておいていただきたいと思えます。これからの4年間でどのように過ごすかが、皆さんの将来を決定することになります。

充実した4年間の大学生活を送るヒントになる言葉を紹介させていただきます。アメリカの教育関係の言葉に、「I heard. I forget.」、「I saw. I remember.」、「I did. I understand.」があります。これは「講義などで聞いたことは、すぐに忘れる」、「目でみたことは、記憶している」、「自分みずから行ったことは、理解している」という意味になるかと思えます。これに関連した興味ある研究結果が報告されています。ヒトは10年後、学習したことをどれだけ記憶に止めているかです。講義で習ったことはわずか5%であり、視聴覚を通しては約20%、討論やフィールド学習は50~70%、一番記憶に残る学習の仕方は、習ったことを誰かに教えることで、これは実に90%です。

これらの事は、学習する場合に「I did. I understand.」が、最も効果的であることを示しています。では日常の学生生活の中で具体的にどうすればよいのか? 講義を聞いている時に、ただ漠然と講義を聞き、ノートをとっているだけではなく、自ら色々と疑問を持ち、自分で調べることが重要だということになります。自分で調べて分かったことは、絶対に忘れない、血肉となる知識になります。また一つ知ること、かえって疑問は増えていきます。自らがこのような探究心を持ち続けることです。また、新聞などを利用することだと思えます。最近でも鳥インフルエンザ、狂牛病、鯉ヘルペスなど薬学・医学に関する報道が多く見られます。幸い皆さんは非常に恵まれた時代に居られます。図書館がなくてもインターネットから多くの情報を、

日本のみならず世界から得ることができます。毎週2つ位の課題を自分に課し、調べて自分でまとめることです。継続すれば1年後には約90の課題が処理できることになります。こうなれば大したものです。3号館の情報処理センターに皆さんが使用することができるコンピューターが用意されていますので、せいぜいご利用下さい。

皆さんも良くご存知の歴史小説家の司馬遼太郎は、学生の時に「先生、アメリカのニューヨークはどのような意味ですか？」と質問し、それに対して先生は「ニューヨークはニューヨークだ」と返答されたそうです。これに疑問を感じ、自らが調べ、ヒトの名前であることがわかったそうです。このことも歴史小説家になるきっかけを与えてくれた一つだと述べられています。有名な物理学者で随筆家・俳人でもある寺田寅彦は「目はいつでも思ったときに閉じることができるのに、耳の方は、自分では閉じることが出来ないように出来て居る。何故だろう？」と述べられています。また大学の先生が四苦八苦した小学生の質問を紹介したいと思います。ある会の時に小学生が「体を切ったら赤い血がでてくるのに、おっばいはなぜ白いんですか」と質問したそうです。皆さんだったらどのように返答しますか？この様な小学生の感覚をい

つまでも持ちたいものだと思います。ヒトから「子供みたいなヒト」だと言われたら、ほめられたと思うべきと言われたりしております。「幼児性」のある方が、創造的な仕事ができるとのこと。

将来、指導的な立場になられることを自覚し、充実した学生生活を過ごされることを期待しております。そして卒業時の皆さんの成長を楽しみにしております。

## 建築関連ニュース — その16 — 学長 西野 武志

愛学館工事は4月現在、予定より若干早く進み、現在後期工事分の約30%が終了し、2005年3月末日竣工に向けて順調に進んでいます。

既に最上階の7階まで鉄骨が立ち上がり、2004年3月末までに2階の柱・梁・壁及び3階床のコンクリートの打込みが行われました。現在行っている後期工事は、B1階～倉庫・共測室・機械室 1階～学生ホール・事務室・会議室 2階～実習室・準備室・事務室・会議室 3階～実習室・準備室・小講義室 4階～実習室・準備室・小講義室 5階～研究室(2研究室) 6階～研究室(2研究室) 7階～会議室・事務局長室・理事室・事務室等々の諸室で構成されており、前期工事で2階途中で行き止まりになっていた大階段と学生ホール・講義室・実習室等が繋がり各室の利用が機能的に連携が取れるようになります。(北側の仮設鉄骨階段は完成後撤去の予定)

愛学館は全体が完成する事によって避難面や防災面でより効果的になり、また耐震性の観点から、鉄骨と鉄筋コンクリートを重ね合わせた鉄骨鉄筋コンクリート構造と呼ばれている形式を採用し、強度と粘りを合せ持つ耐震性に優れた建築となっており、阪神淡路大震災級の地震にも耐え、薬学研究という用途上振動を嫌う機器に対しても支障の生じない様に設計・施工を行っておりますのでご安心下さい。

後期工事が完成しますと愛学館全体は、鉄骨鉄筋コンクリート構造、地上7階建、地下1階、建築物の高さ29.6m、延床面積約13,607㎡となります。完成までこれから約1年程度の工事期間があり御迷惑をおかけしますが、御辛抱のほどよろしくお願い致します。



いよいよ創立120周年目にあたる2004年度が開始になった。

今回の特集も前回に引き続き『卒業生からのメッセージ』で、その第二弾をお届けする。

今回は新年度最初の号ということもあり前号をはるか上回る卒業生の方々からメッセージが届いた。

投稿いただいた卒業生の皆さんは京都薬科大学第一回卒業生から最近の卒業生まで親子孫3世代ぐらいの世代の違いがある。

各投稿者が京都薬科大学生であったころの時代背景は大きく違っているが、共通することは京都薬科大学に自分の夢を託しそれに邁進した姿であり、貴重な学生生活をエンジョイしようとする熱き思いである。

4月号(春季号)は入学式にあわせて発行されるので、特に新入生の皆さんには先輩からの熱いメッセージは、これから始まる大学生活を送る上で大いに参考になるだろう。熟読してほしい。

## 人との出会いを大切に



小塚 睦夫

昭和26年卒(京都薬専)  
昭和28年卒(天然物化学教室)  
本学名誉教授

Visiting Research Professor,  
School of Pharmacy  
University of North Carolina at  
Chapel Hill, U.S.A.

私が化学の実験に初めて興味を引かれたのは本学での無機および有機薬化学実習でした。化学反応により物質を製造する際に出会う色々な現象に心を奪われ、特に有機化学反応の理路整然とした体系に魅せられました。制規の学生実習だけでは物足りなくて、有機サークル(当時は卒論制度は未だ無かった)に入れて頂き、放課後、休暇中も毎日、今は無い粗末な木造の実験室で木本正七郎、岡本正夫両先生に手を取って有機合成実験を教えてくださいました。

それから50年、未だにここ、アメリカ合衆国、州立ノースカロライナ大学チャペルヒル校(UNC-CH)、薬学部、天然物研究室で抗がん、抗HIV活性などを持つ天然物質および天然物によるがん予防に関する研究を続けています。

本学卒業後、京都大学医学部薬学科(現薬学部)有機薬化学講座で天然物化学研究に従事したことがきっかけになり、本学の生薬学教室に勤務することになりました。当時は本学に大学院は未だ設置されておらず、博士の学位を得るには学位審査権のある少数の大学で取得する必要がありました。私の場合は京大の出身教室に生薬学教室の嶋田玄彌、澤田徳之助両先生のご理解と御援助のお陰で本学に在籍のまま、派遣して頂いて富田真雄先生(後に本学学長)のご指導で学位を得ることが出来ました。その後、UNC-C薬学部、コロンビア大学化学科、カリフォルニア大学パークレー校天然資源学部などに留学あるいは共同研究のために海外出張し、また、本学を定年退職後は本学同期の友人である伊藤義博博士の御好意で生産開発科学研究所で研究を続けさせて頂きました。いずれの場合も多くの人々に知己を得たおかげで機会を与えられ、学問的な刺激に満ちた新しい違った世界を知り、楽しい、有益な時を過ごすことが出来ました。また、本学における研究も木島孝夫助教授はじめとする教室員の皆様、多くの同僚、友人の方々の御協力により、進めることが出来ました。

これまでの過ぎ來しかたを振り返りますと、紙数の都合で一々、お名前を挙げる事が出来ませんが、いろいろな時期、所で私の出会った多くの方々、優れた師、良き先輩、友人、後輩の皆様のサポートによって現在の私があるのであって、自

分の力だけでここまで来られたとは思っていません。現にこうしてUNC-CHで仕事ができるのも、長年の友人である Professor K.H. Leeのひとりならぬご好意によるものであり、自分は lucky guyだと思っています。

在学生およびこれから社会へ出て行く同窓の皆様は人との出会いを大切に、人間関係を深め、自己の努力と共に未来に大きく飛躍して頂きたいと願っています。

## MRを希望される方へ



鈴木 信人

昭和46年卒（薬理学教室）  
武田薬品工業（株）  
四国支店 支店長

私が大学に入ったのは1967年（昭和42年）丁度佐藤内閣の頃で世相としては、昭和元禄真っ盛り頃だった。

教室は薬理学教室（当時の宮田貞雄教授）に入った。この教室は、実習は殆どが女性で男性は小島康宏君（現新潟県立吉田病院薬剤部長）と2人だけだった。男性が少なかった為かどうかは不確かだが、教授からの強雷はいつも2人に落ちていた気がする。今はどうか知らないが、当時は実習器具の不足で、準備段階でいつも女性群に負けていて、ガラス器具特にピペットやメスシリンダーの傷がついて見難いものや少し先が欠けているものでも実験した。テーマは「メフェナム酸（ポンタール）の薬理作用」で、完成したての動物室で夜を徹して尿中排泄のデータを収集したことを憶えている。実験を通じて教授から教えていただいた中で、一番記憶にあるのは、実験動物を通して「生命の尊厳性」と生命関連製品である「医薬品」はどうあるべきかという命題に対する問答だった。

就職は成績や性格からMRを希望した。当時はまだ勘・経験・根性が中心のプロパーと呼ばれているところである。希望通り武田薬品へ何とか入社することが出来た。最初は大阪市内の中小病院・開業医を担当した。運良く4年間で好業績を上げた。その実績が買われてか、その後阪大病院を担当し、足掛け13年も担当した。今思い起こせばその間の仕事を通してのDrとの交流が、MR時代を含め、今の自分を形成していると思う。今まで私がMRとして大切だと思ったことはいろいろあるが主なもの

は以下の5つ

1. 「目標を達成する」ことに対する強い執念と「勝負に勝つ」ことへのこだわり
2. 人と話すことが好き
3. 夢と感動を追いつづける情熱がある
4. 自己管理が出来る
5. 経営（商売）感覚がある

である。

近い将来変わるかもしれないが、MRで入社すれば退社するまで毎期（6ヶ月単位）品目別計画数字が与えられ、その数字を達成するために日夜情報活動を続ける事は覚悟しなければならない。辛くもあり楽しいことでもあるのだが、目標に対するギャップを一生懸命やって縮める事の連続である。うまくいかない時の解決方法は、科学的に自分の行動を分析し、諦めずに情報活動を続けること。振り返りながら一生懸命仕事を続けると不思議とギャップは埋まってくるものである。MRを希望される方は「医療の一端を担う担当者」として、「会社の顔」として誇れる立派なMRを目指して欲しい。

## 不器用でいいじゃない...青春の生き方



大槻 浩

昭和54年薬学部生物薬学科卒業  
（応用薬理学教室）  
昭和57年大学院修士課程修了  
昭和60年大学院博士課程修了  
（薬学博士）  
武田薬品工業株式会社  
コーポレート・オフィサー  
ヘルスケアカンパニー プレジデント

皆さん、お元気でいらっしゃいますでしょうか。10年間も大学にお世話になったからでしょうか、私は大学が好きでたまりません。左京区東山沿いや山科に下宿したことも、大文字山から毘沙門さままで藪ごぎをしながら下山したことも、期末試験前日にもかかわらず友人と杯を重ね、酩酊とともに朝を迎え受験したことも、それぞれ懐かしい思い出です。今にして思えば、思い出を越えて大切な器量作りの時期だったと思っています。初めての講義に感激して先生方を訪ね歩いたこともありましたが、一方、興味が無いので全く勉強しないで単位を落としてしまったことも、主任教授と喧嘩して大学院の入学試験をすっぱかし、入学が一年おくれたことさえあります。それでも不思議なことに、再試験を受けた教科のことは良く覚え

ていますし、喧嘩した主任教授、岡部進先生は人生唯一の恩師と思っています。算段尽くめではない、蹉跎尽くめの青春でした。そうした蹴つまずいた時には必ず苗字に「お」の付く友人達が集まって来るのでした。名簿で前後する友人は、実習の時は勿論のこと、困っていると「どうした、どうした」と下宿にやってきては迷惑にも嬉しくも数日間逗留していくことでした。

さて、私は28歳で社会人になり、製薬業界に身を置き約20年になります。最近、改めて感じていることは、当然にも求められるレベルが高くなった医薬品の安全性有効性に対し、応え続けることの社会的使命と責任の重さです。生命にかかわるお薬を生業とする事業には、高い倫理性と科学性が求められます。明解な答えが見出せるときには人は性善に動きますが、しかし、明解な答えが見出せないときこそ、私を利することなく社会的正義に則って判断できなくてははいけません。判断の八割がたは、自分の器量の範囲内で正しくできるものです。残りの二割は、判断の拠りどころになるものが求められなくても判断せざるを得ないことが多くあります。そのときこそ決断というものが求められます。判断力や倫理性は、学生時代に培われ始めたと思っています。こうした決断を求められたときにいつも思い出す学生時代に読んだゲーテの一節を思い出します。「努力しうることには最大限の努力を図るも、超えられない絶対に対しては頭を垂る」。学生時代の多様な経験を通して、その後の生き方の根拠となっていることが多くあります。生き方が不器用だったことも、よく考え粘り強く行う修練にもなったように思います。皆さんそれぞれの学生時代を精一杯生きてください。楽しみです。

## あっ!!という間の二十年



吉田 俊明  
昭和60年卒  
(衛生化学教室)  
大阪府立公衆衛生研究所

初めて京薬大を訪れた日、本校正面のテニスコートと隣の三角形の大学ホール、レンガ造りの校舎など、とても印象深く感じたことを今でも覚えています。在学中の四年間、大阪の南部から山科まで毎日片道二時間余りかけて通いました。アル

バイトもしていたので家に帰ればほとんど寝るだけの生活でしたが、それなりに充実していたと思います。学生時代は、実習や実験の途中で何人かで抜け出し学食やホールで“しょっちゅう食べていた”ことが、懐かしく思い出されます。卒業してもうすぐ二十年。「ほんまかいな・・・」という感じです。

私は大阪府の職員として衛生研究所に勤務しています。皆さんにはあまり馴染みがないところだと思いますが、衛生研究所は各都道府県と大阪市や京都市などの政令指定都市に必ず設置されています。衛生研究所の業務は、細菌やウイルスなどによる感染症に関すること、食中毒や残留農薬など食品衛生に関すること、上水や下水の水質、労働現場や住宅室内の空気質など環境衛生に関すること等多岐にわたり、保健所とも連携しながら住民の健康に直接関係する試験検査や調査研究を行っています。大阪府の場合、約百人ほどの研究員がこれらの仕事を分担しています。近年では、狂牛病、o-157 大手食品会社の牛乳事件、ダイオキシンなどが社会的な話題となりましたが、その都度関連するセクションが対応してきました。

国は国立大学や国立の研究機関の独立行政法人化や統合を進めており、この波はいずれ各地方の公設試験研究機関にも及ぶと思われます。私の職場でも昨年大幅な組織改革を行い定員がかなり減少しました。所内には理科系の色々な学部学科出身者がいますが、退職者後の欠員は、最近ではほとんど薬剤師と獣医師で補充されています。必ずしも薬剤師の資格がなければできない仕事ではないのですが、人(生物学)と化学物質(化学)の両方の学問に関する知識を期待されているからだと思います。衛生研究所では薬剤師は重要な人材です。

皆さんは卒業後、病院や製薬会社をはじめ色々な分野に就職されることと思いますが、どんな就職先であっても在学中に学んだことや経験したことは必ず生かされることと思います。社会人として出発した頃は、先輩や上司から教えてもらうことばかり。知らないこと、わからないことがいっぱい自信をなくし、不安になることもあるかと思っています。そんな時学生時代のことを思い出してください。きっと、乗り越えるヒントがあるはずです。がんばってください。皆さんのご活躍を期待しています。

## コミュニケーションスキル



西口 工司

平成元年卒（薬理学教室）  
平成3年修士課程修了  
（病院薬学教室）  
平成10年博士（薬学）  
（京都大学）  
神戸大学医学部附属病院  
薬剤部 副薬剤部長

私は、前回、阪神タイガースが優勝した1985年に入学しましたが、バブル景気と同様、『あっ!』という間に四年間が過ぎ去り、気が付けば卒業、進学を経て就職していたというのが実感です。

さて、この時期、薬剤師にとっては以後の方向性を左右する大きな変革が生じていました。すなわち、薬剤師が入院患者様に服薬指導を実施することが、入院調剤技術基本料（当時は100点業務と呼ばれ、現在の薬剤管理指導料）として診療報酬上で定められたのです。そして15年以上を経過した今日、病院薬剤師が行う仕事は、薬剤部内の調剤業務から病棟での服薬指導業務へ移行するとともに、仕事の対象は『モノ』としての医薬品から医薬品を使用する患者様を中心とした『ヒト』へ大きく転換しています。私が勤務する神戸大学医学部附属病院におきましても、服薬指導業務（薬剤管理指導業務）をはじめ、病棟サテライト薬局、感染制御チームや院内の医療安全管理面等において、薬剤師がチーム医療の一員として薬剤部以外の場で活動する機会が拡大しています。このような『ヒト』を対象とした業務展開において、これから薬剤師を目指す皆様には『コミュニケーションスキル』の習得を意識していただきたいと思います。今やこれは医療人として出発する時から求められる必須の能力であり、多くの成書も出版されています。臨床の現場では、患者様をはじめ様々な相手の立場で物事を見つめ、医薬品のプロである薬剤師の観点から物事を判断することが必要となります。この時、相手とのコミュニケーションをうまく図りながら、良好な対人関係を構築できなければ、大きな誤解を生じ、相手には薬剤師の勝手な判断や押し付けとしか受け取ってもらえないばかりか、患者様に対して生命に関わる不利益を与えることにもなりかねないのです。コミュニケーションスキルは、患者様や他の医療従事者が必要としている真の情報を選別して提供するためには欠かすことのできないものであり、医薬品に関して習得した知識を有効に利用するための術とも言えるのです。

学生の皆様は、日々過密なカリキュラムに追われ、

多忙な毎日を過ごされていることと思います。しかし、この時期の様々な経験や思い出、また恩師、友人、先輩や後輩との出会いが、これからの人生の大きな支えになることなのでしょう。視野を広くし、失敗を恐れることなく、よく遊び、よく学び、学生時代を充実したものにしていきたいと思えます。そんな中でも『コミュニケーションスキル』を高めるヒントが隠されているのではないのでしょうか。

## わたしと彼女の生きる道



糠野 嘉則

平成元年卒（薬理学教室）  
タイルの製造販売メーカー  
鈴製陶株式会社

<二つの運命の分かれ道>

私はかなりの勉強好きの為、3回生を2回経験しました。その時はバレーボール部で力の入れ過ぎ、遊び過ぎ、のせいにしていましたが、試験期間中に深夜遅くまで一緒にビリヤードをしていた友人は現在薬理学教室の助教授になってしまっているので、言い訳にはなりません。しかし、3回生を2回やったおかげで1学年下の今の妻と薬理学教室で出会うことになったということは、自分の意思で決めた事ではないですが、この留年が二つ目の運命の分かれ道だったのです。

大学を5年で卒業し薬剤師の免許も取得、当時の大幡教授のお口添えがあり第一希望の山之内製薬の営業に晴れて就職しました。その5年後に結婚、その2年後に二つ目の分かれ道で、現在の会社への婿入りを決めました。変な言い回しですが、妻の実家が岐阜県笠原町という茶碗やタイル等の焼き物の産地（美濃焼）で、タイルの製造メーカーであったところへ、姓は糠野のまま、再就職をしたということです。

私にとってはこの会社への婿入りが二つ目の大きな大きな分かれ道でした。入社して3年で取締役という肩書きが付きましたが、営業だけではなく、土と油と汗にまみれて工員さん達と一緒に作業をするその姿は、皆さんの想像する会社役員とはおそらくかけ離れたものだと思いますが、皆さんの想像以上にやりがいを感じながら仕事をしております。

<やりがい>

転職のきっかけは社長（義父）の弟（義叔父）である専務の一言「跡継ぎという意味ではなく、同じ営業なら形として後に残るものの営業の方がおもしろいんじゃない？」でした。

鈴製陶では主に外装タイルを製造しています。単一大量生産で完全に工業化されたタイルではなく、石を割った様な凹凸のあるタイルや、他社に容易にまねの出来ないオリジナルサイズ・形状・色のタイルが主力商品です。

営業で各地をまわる傍らに、過去に納めた現場を見る度実感することは、社会に対して自分の足跡が残っているということ、建築文化・住文化の一役を担い、形あるものとして後世に残るものを創っているということです。この思いが今の自分を突き動かす原動力となっています。これこそがやりがいだと思います。

営業という仕事は売ってなんぼのもんですから、山之内製薬でも数字を上げる事が一番大事な事だと思っていました。社内評価はその数字によりされて、その報酬としてお給料を貰うのですから当然の事です。しかし仕事のやりがいというのは数字の達成感や報酬額だけではなく、自分がいかに社会的に貢献しているか、その役割をイメージできるか、なのだと思います。

医薬品の営業でも、研究でも、調剤でも一緒です。その医薬品のおかげで命を取り止める、苦痛が減る、病状が改善されるなど健康な状態に近づくことにより医薬品を与えられた本人や周りの人達の笑顔を想像できれば、きっとそれが明日への原動力、すなわちやりがいになるのだと思います。

<最後にひとこと>

こうして文章を書いている横で、「それなら、鈴製陶に転職しなくても山之内製薬で良かったんじゃない？」と妻から言われ、「鈴製陶で働いているからこそ、こうして悟りを開いたんやっ

」

## 保険調剤薬局の薬剤師を目指す学生諸君へ



鎌足 雅之

平成 12年 3月 学部卒業

平成 14年 3月 修士課程修了

（代謝分析学教室）

マルゼン薬局三国駅前店

薬局長

私は 2 年前の平成 14年 3月に京都薬科大学大学

院修士課程を修了し、現在は淀川区の調剤薬局に勤務し、薬剤師を教育研修する仕事を担っています。

全国的に見てみると、京都府と大阪府は医薬分業が遅れている地域と言われていましたが、最近はいたる所で薬局を見かけるようになってきました。

およそ 10年前から急展開した医薬分業のおかげで、今の日本には薬剤師が不足していると言われて、就職には全く不安は無く、希望する職種に就職ができないときには調剤薬局に行けばいいとさえ言われてきました。多分現在も進路支援課にいけば調剤薬局の求人案内は山ほどあるでしょう。

わが国の各種保険の財政状況は厳しく、平成 14年からは患者の負担割合等が増加しました。それに伴い、長期処方主流になり、主に薬を服用する老人の受診回数や服用薬剤は減少し、医療機関、保険薬局ともに全国的に減収となっているのが現状です。さらに度重なる調剤報酬の改訂（もちろん減益の方向）でもあり、学生諸君が考えているほど保険薬局や薬剤師を取り巻く環境は甘い状況ではありません。

このような現実の中で我々薬剤師はどのようにしなければならぬのでしょうか？薬剤師はほとんどの場合、いわゆる会社員ですから、会社は優秀な人間しか要らない！ということになりつつあります。しかし残念ながらほとんどの医療機関に勤める薬剤師は本物とはいいがたい現状です。なぜなら、薬の専門家といえるほどの知識を持っていないのです。（国家試験の後、一年も経つと忘れてしまう）。例えば「風邪薬」についても十分な説明ができないのです。そんな訳が無いと思う学生諸君がほとんどと思いますが、患者さんには適当に説明できても医師に詳しく説明できるかどうかとなると、どうでしょう？医師に説明できる知識レベルを持ち合わせていないととも『薬剤師』とは言えないでしょう！風邪薬程度と言っても「NSAIDs」「抗アレルギー薬」「抗生剤」など色々あります。この3項目だけでも頻繁に使用されている薬剤は30種類を超えるでしょう。薬剤をどのような症状のときにどのように組み合わせるのかということになると、もうお手上げです。これらの薬を「毎食後に飲んでください」「おだいじに」と言うだけの薬のお渡し係なら医薬分業はもとより、薬剤師は要らないでしょう！結局のところ人手不足ではなく、人材不足。国家試験はスタート地点、そこから薬剤だけでなく疾患別の治療方針もマスターしてやっと「調剤師」から「薬剤師」になるのです。勉強を教えてもらえるのは大学を卒業するまでです。薬剤師になるということは、自分自身で学んで多くの専門知識を身につけて「先生」になるということなのです。京薬出身の薬のプロとしてお互い頑張りましょう。

## 食品衛生監視員としての日々・・・



岩橋 寿恵

平成 14年卒

(病態生化学教室)

厚生労働省 横浜検疫所  
輸入食品・検疫検査センター

私は卒業後、厚生労働省の付属機関である横浜検疫所に就職しました。就職する前は、検疫所って何？何する所？という感じで、かろうじて関わりがあるのは海外旅行の帰りの空港のみでした。そんな私が現在籍を置いている、横浜検疫所輸入食品・検疫検査センターの主な業務は、感染症と輸入食品の検査です。採用された年は、ウイルス係に配属され、各検疫所で捕獲された蚊のデング熱・マラリア・ウエストナイル熱等の病原体保有検査や、ねずみのペスト・腎症候性出血熱ウイルスの抗体検査を行っていました。PCRやELISAなど、大学では未経験のことがたくさんありすぎて、毎日毎日、頭がパンク状態。その上、本来のおっちょこちょい気質が巧を奏し(?)、消毒用エタノールでびちょびちょの自分の手を直接パーナーで燃やす始末。周囲のあきれた顔が今でも忘れられません。また食品ではSRSV(Norovirus)やA型肝炎ウイルスの検査に携わっており、輸入二枚貝よりA型肝炎ウイルスを検出しました。食品の場合、不合格と判断されたものは、廃棄や輸出国への積戻し等の行政措置が行なわれることから、ウイルスが検出され、陽性となった時はとてもドキドキしました。本当にこんなに責任重大な仕事を、私がしていてもいいのだろうかと不安に思ったこともありました。しかし、周りの優しく厳しい上司や先輩方のおかげで何とか一年目を無事終えることができました。二年目は組織改正があったことから、動物医薬品チームに配属され、日夜、輸入食品の残留抗生物質の検査に追われています。これは微生物を用いた検査で、年間約七千件行います。何が大変かというと、検体の前処理(通称『肉切り』)です。毛をむしらただけの丸のままの鶏やうさぎ、ぬるぬるのうなぎやドジョウ、極めつけはスッポン(もちろん生きています)までがセンターに届けられます。それを捌いて必要部位を採取し、ミンチして検査検体とします。この『肉切り』こそが一番体力を消耗し、時には精神力さえも奪ってしまう恐ろしい作業です。そんな嵐のように忙しい中、今年(2004年)の1月には、検疫医学会で発表を行うという大役を担うこととなり、休む間もなく、

勉強また勉強の日々です。

この原稿の依頼を受けて、改めて大学生活を思い出し、懐かしい気持ちで一杯です。特に、病態生化学教室での一年は、佐藤先生を始め先輩方に勉強・研究のご指導だけでなく、よく遊んでいただきました。今日の私が楽しく明るく自信を持って仕事ができるのも、その一年間のおかげだと感謝しています。

## 京都薬科大学愛学館にて国際学会開催

2003年11月14日～16日の3日間、本学愛学館において「国際アスパラギン酸プロテアーゼとインヒビター会議2003(ICAPI03)」が開催されました。世界中から著名な研究者が集まり、講演会場となった愛学ホールでは2題の招待講演、1題の一般講演が行われ、またポスター講演会場でも活発な討論が繰り広げられました。

本学会は、米国オクラホマ州にて第1回会議が開催されて以来主要各国を巡ってきました。第9回の開催となった今回(日本での開催は2度目)は、京都工芸繊維大学および本学創薬科学フロンティア研究センターが主催となり、日本薬学会、日本化学会、日本農芸化学会、日本ペプチド学会の協賛、そして文部科学省、米国国立保健研究所の後援も得ています。最終的には17カ国172名もの参加者が集い、成功裡に閉会することができました。ICAPI03に関する情報はホームページにも掲載されています。  
<http://www.kyoto-phu.ac.jp/icapi/>

